水産研究・教育機構 機関リポジトリ
FRA Japan Fisheries Research and Education Agency Institutional Repository

藻場・干潟の生物群集の解明と生物育成機能評価手法の開発

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010169

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

藻場・干潟の生物群集の解明と生物育成機能評価手法の開発

瀬戸内海区水産研究所　生産環境部

研究の背景・目的

- 瀬戸内海の漁業生産は低下の一途をたどっていますが，その原因として埋め立て等の海岸開発により，藻場・干潟を含む“浅場”が減少してきたことが挙げられています。
- 瀬戸内海では，漁業生産を増やすために水産庁が国土交通省と共同で“今後20年間で浅場修復600ha”のスローガンを掲げ，浅場（干潟・藻場を指す）の修復・再生に取り組んでおり，どこにどれだけの藻場・干潟を再生するのかについて科学的根拠が求められています。

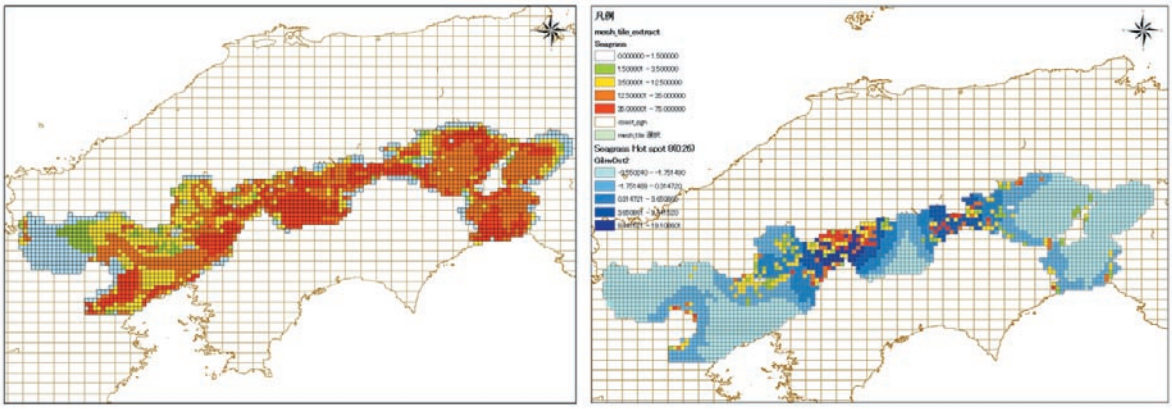
研究成果

- 藻場・干潟の水産上重要種の生活史完結型調査を可能とするために，卵及び発生初期の幼生の種判別法を当初計画の種だけでなく府県等の要望により複数種で開発しました。
- 藻場の生物生産機能を定量的に評価するための第一歩として，水産対象となる魚類の空間分布と藻場・干潟・（魚礁など）との関係をGISによる空間解析によって明らかにしました。

波及効果

- 水産生物の生活史に配慮した藻場・干潟の造成手法について提言が可能となります。
- 瀬戸内海での種苗放流の効率化や持続可能な漁業を成立させるための藻場・干潟の適正な配置や面積が求められ，具体的な政策立案が可能となります。

結果の一例：ヒラメの一集団の空間範囲とアマモの分布



生態学的手法を用い、両者の関係を解析する方法を開発

例えば、ヒラメを増やすためには瀬戸内海全体でどれだけの藻場・干潟が必要で、どこに配置すれば良いのか？が計算可能となった。